

電信柱と妙な男

小川未明

青空文庫

ある町まちに一人ひとりの妙みょうな男おとこが住すんでいた。昼間ひるまはちつとも外そとに出でない。友人ゆうじんが誘さそいにきても、けつして外そとへは出でなかつた。病びよう気きだとか、用事ようじがあるとかいつて、出でずにへやの中なかへ閉とじこもつていた。夜よるになつて人ひとが寝静ねしずまつてから、独ひとりでぶらぶら外そとを歩あるくのが好すきであつた。

いつも夜よるの一時じごろから三時じごろの、だれも通とおらない町まちの中なかを、独ひとりでぶらぶらと歩あるくのが好すきであつた。ある夜よ、男おとこは、いつものように静しずかな寝静ねしずまつた町まちの往おう来らいを歩あるいていと、雲くも突つくばかりの大おお男おとこが、あちらからのそりのそりと歩あるいてきた。見上みあげると二、三丈じようもあるかと思おもうような大おお男おとこである。

「おまえはだれか？」と、妙みょうな男おとこは聞きいた。

「おれは電でん信しん柱ばしらだ。」と、雲くも突つくばかりの大おお男おとこは、腰こしをかがめて小聲こゝろえでいつた。

「ああ、電でん信しん柱ばしらか、なんでいまごろ歩あるくのだ。」と、妙みょうな男おとこは聞きいた。

電でん信しん柱ばしらはいうに、昼間ひるまは人ひと通とおりがしげくて、俺おれみたいな大おおきなものが歩あるけないか
ら、いまごろいつも散歩さんぽするのに定きめている、と答こたえた。

「しかし、小男こおとこさん。おまえさんは、なぜ、いまごろ歩あるくのだ。」と、電でん信しん柱ばしらは聞き

いた。

「妙な男はいうに、俺は世の中の人がみんなきらいだ。だれとも顔を合わせるのがいやだから、いま時分歩くのだ。」と答えた。それはおもしろい。これから友だちになるうじやありませんかと、電信柱は申し出た。妙な男は、すぐさま承諾していうに、

「電信柱さん、世間の人はみんなきらいでも、おまえさんは好きだ。これからいっしょに散歩しよう。」といつて、二人はともに歩き出した。

しばらくすると、妙な男は、小言をいい出した。

「電信柱さん、あんまりおまえは丈が高すぎる。これでは話しづらくて困るじゃないか。なんとか、もすこし丈の低くなる工夫はないかね。」といった。

電信柱は、しきりに頭をかしげていたが、

「じゃ、しかたがない。どこか池か河のふちへいきましよう。私は水の中へ入って歩くと、おまえさんとちようど丈の高さがおりあうから、そうしよう。」といった。

「なるほど、おもしろい。」といつて、妙な男は考えていたが、

「だめだ。だめだ。河ぶちなんかいけない。道が悪くて、やぶがたくさんあつて困る。おまえさんは無神経も同然だからいいが、私は困る。」と、顔をしかめて不賛成をと

なえだした。

電信柱は、背を二重にして腰をかがめていたが、

「そんなら、いいことが思いあたった。おまえさんは身体が小さいから、どうだね、町の屋根を歩いたら、私は、こうやって軒について歩くから。」といった。

妙な男は、黙ってうなずいていたが、

「うん、それはおもしろそうじゃ、私を抱いて屋根の上へのせてくれ。」

と頼みました。

電信柱は、軽々と妙な男を抱き上げて、ひよいとかわら屋根の上を下ろしました。

妙な男は、ああんともいえぬいい景色だと喜んで、屋根を伝って話しながら歩きました。するとこのとき、雲間から月が出て、おたがいに顔と顔とがはつきりとわかりました。たちまち妙な男は大きな声で、

「やあ、おまえさんの顔色は真っ青じゃ。まあ、その傷口はどうしたのだ。」と、電信柱の顔を見てびっくりしました。

このとき、電信柱がいうのに、

「ときどき怖ろしい電気が通ると、私の顔色は真っ青になるのだ。みんなこの傷口は

針線はりがねでつつかれた痕あとさ。」といいました。

すると、妙な男みようおとこは急に逃にげ出だして、

「やあ、危険きけん！ 危険きけん！ おまえさんにや触さわれない。」といったが、高い屋根たかやねに上あがって
いて下おりられなかつた。

「おい 小男こおとこさん、もう夜よが明あけるよ。」と、電信柱でんしんばしらがいった。

「え、夜よが明あける？ ……」と、妙みような男おとこは東あづまの空そらを見みると、はや白しろ々と夜よが明あけ
かけた。

「こりやたいへんだ。」といいざま、電信柱でんしんばしらに飛とびつこうとして、またあわてて、

「や、危険きけん！ 危険きけん！」と、後あとじきりをするすると、電信柱でんしんばしらは手てをたたいて、ははははと
大口おおくち開あけて笑わらつた。

「小男こおとこさん、私わたしは、こうやっていられない。夜よが明あけて人ひとが通とおる時じ分ぶんには、旧もとのところ
へ帰かえつて立たつていなければならんだ。おまえさんは、独ひとりこの屋根やねにいる気きかね。」と、

電信柱でんしんばしらはいった。

妙な男みようおとこは困こまつて、とうとう泣なき出だした。かれこれするうちに、人ひとが通とおり始はじめた。電信
柱ばしらは、とうとう帰かえる時じ刻くを後おくれてしまつて、やむをえず、とてつもないところに突つつ立た

つて、なに知らぬ顔でいた。妙な男は独り、

「おい、おい、電信柱さん、どうか下ろしてくれ。」と拝みながらいったが、もう電

信柱は、声も出さなけりや、身動きもせんで、じつとして黙っていた。通る人々は、みんな笑つて、

「こりや不思議だ、あんな町の真ん中に電信柱が一本立っている。そして、あの屋根に

いる男が、しきりと泣きながら拜んでいる。」

といつて、あつはははと笑つていると、そのうちに巡查がくる。さつそく妙な男は、盗

賊とまちがえられて警察へ連れられていきましたが、まったくの盗賊でないことが

わかつて、放免されました。それからというもの、妙な男は夜も外へ出なくなつて、

昼も夜もへやに閉じこもっていました。そして、その電信柱も、いろいろ世間でうわさがたつて、もう夜の散歩はやめたということでもあります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第2刷発行

※表題は底本では、「電信柱《でんしんばしら》と妙《みよう》な男《おとこ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空作業員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空作業員チーム校正班

2011年11月2日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.azora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

電信柱と妙な男

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>